

はちおうじくるまにんぎょう

むかしのごらくと八王子車人形

江戸時代から明治時代にかけて人びとの楽しみは一年に何回かおこなわれる祭りや縁日のほか、しばい小屋や寄席（落語やまんざい・手品などが行われる場所）に行くことでした。そこでは、しばいや車人形、うつし絵、じょうりなど演じられていましたが、やがてラジオや活動写真（映画）がでてくると、だんだんとすたれていきました。しかし、現在でも地域の伝統文化として若い人たちにも注目されています。

—車人形のあやつり方—

八王子車人形

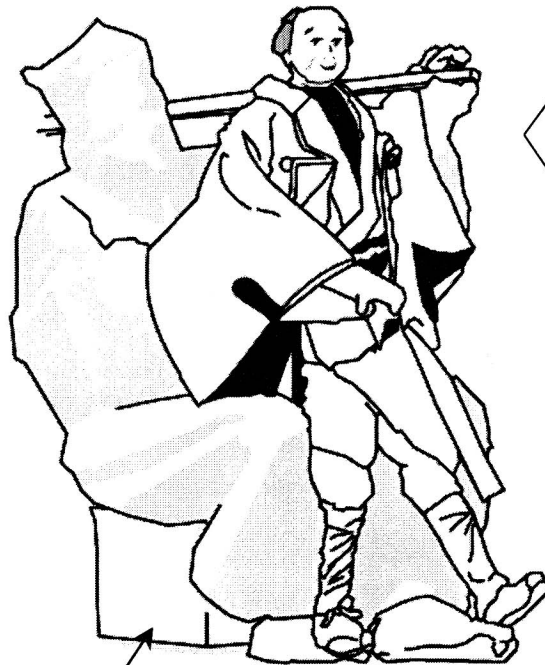
江戸時代の終わりごろ、初代西川古柳（本名は山岸柳吉）という人物が、ろくろ車にすわって一人で人形をあやつる方法を考えました。
 一体の人形を3人であやつる文楽とちがって、人形と人間が一つになるかんじがよく出ています。少ない人数でも演じられることが特徴です。
 現在でも八王子の下恩方町の西川古柳座などで演じられています。

おもな演目

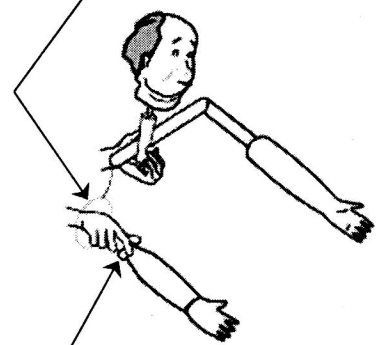
三番叟
 日高川入相花王
 新抄小栗判官物語

説経節

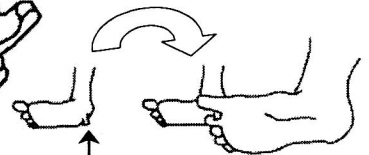
車人形には説経節という語り物にあわせて演じられました。最近では義太夫節（じょうり）を中心に新内（じょうりの一派）や落語などもあわせて演じられています。



この糸を引くと左手首・指が動く。



「チョイ」
 右手首・指を動かす。

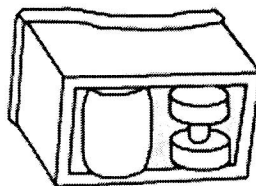


「足がかり」
 足の指にはさんで動かす。

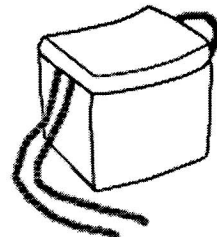
ろくろ車

すわってひもで腰に結びつける。は
 この中には車輪がついていて前後左右に向きをかえやすいような工夫がしてある。

うしろ
 後



まえ
 前



郷土資料館では、車人形を体験できるよ。